

落合信彦

太陽の馬

上

集英社

太陽の馬



落合信彦
Nozomu Ochiwa

集英社

たいよう うま
太陽の馬 ㊤

1995年 5月19日 第1刷発行

著者 ◆ おちあいのぶひこ
落合信彦

発行者 ◆ 若菜正

発行所 ◆ 株式会社集英社

〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

☎03-3230-6100[編集部] 03-3230-6393[販売部] 03-3230-6080[制作部]

印刷所 ◆ 中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂

製本所 ◆ 中央精版印刷株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価はカバーおよび帯に表示してあります。

© 1995 NOBUHIKO OCHIAI, Printed in Japan

ISBN4-08-775193-7 C0093

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次 太陽の馬①

一九九一年 秋 7

帰らざる日々 43

装幀
||
スタジオ・ギブ
写真
||
フォトニカ

目に見えぬ精霊たちにむちをあてられたかのように、時を駆ける太陽の馬は、われわれの運命という脆弱な車をひいてひた走る。勇気をふるい、毅然として手綱を握りしめ、そここの石や傾斜をよけながら、右に左に車を御していくよりほかはない。行き先など、だれにわかろう？ どこからきたのか、それすらほとんど覚えていないのだ。

ゲーテ「エグモント」第二幕 エグモントのことばより

太陽の馬①

主な登場人物

矢島健二

全米で十指に入るコングロマリットのオーナー。元帝商物産社員。

飯島二郎

帝商物産代表取締役副社長。『飯島天皇』と言われるビジネスの鬼。矢島の恩人。

山岡卓也

帝商物産最年少の取締役。『カミソリの山岡』と言われるやり手ビジネスマン。

松林善三

矢島の育て親。『日本最後の俠客』と言われる松林組組長。

松林夕子

矢島とは本当の兄妹のように育てられた松林善三の娘。

管野重夫

帝商物産常務（一九七六年当時）。飯島をライバル視している。

マイケル・スカルピーニ

夕子の恋人。通称マイク。シシリアン・マフィアの後継者。

葉春花（イエ・チュンハ）

矢島の恋人。通称エレヌ。葉グループの総帥・葉春雲の長女。

一九九一年
秋

「判決を言い渡します。被告人、前へ出て下さい」

静まり返った法廷内に裁判長の声が響いた。飯島二郎は立ち上って、ゆっくりと中央に進んで三人の裁判官に向って一礼してから、胸を張って直立不動の姿勢で立った。

法廷内の重々しい緊張は頂点に達していた。裁判長の顔も心なしか紅潮している。

「主文、被告人飯島二郎を懲役二年に処する。この裁判確定の日から三年間右刑の執行を猶予する」

緊張の糸が切れたように廷内にざわめきが起こった。記者席を埋めた記者たちがいっせいに立ち上り、入口に向った。彼らの同僚たちが交代要員として入ってきて、メモ帳を手に席に着く。

矢島健二は、傍聴席の片隅からジーツと飯島のうしろ姿を見つめていた。昨夕、成田に着いた矢島は、その足で成城にある飯島の家を訪ねた。そのとき、飯島が漏らした言葉が矢島の脳裡をよぎっていた。

「明日の判決は有罪だろう。でもそれでいい。これもゲームのルールのひとつなんだ。悔いはない……」

裁判長が飯島にすわるよううながした。

飯島は再び一礼して、被告人席に戻った。裁判長が判決理由の要旨の朗読を始めた。飯島がかつて代表取締役副社長を務めた帝商物産や、事件に関係した子会社や外国企業についての概要から入り、飯島二郎や他の関係者の経歴、そして金銭の授受についての具体的状況など、裁判長はやや早口だが淡々とした調子で朗読を続けた。しかし、すべてはアンティ・クライマックスだった。

飯島は両手を膝の上に載せ、背筋を真っ直ぐにのばし、視線を数メートル先の床に据えて身動きもせずにすわっていた。

その姿を見ながら、矢島は心の中で叫んでいた。『何もかも間違ってる！ オヤジさんがこんな仕打ちを受けるいわれはない。これではまるで、化け物ショーのさらし者ではないか』

裁判長の朗読は続いた。

「被告人飯島の判示各所為中、議院証言法違反の点は、極めて計画的犯行である上、衆議院予算委員会におけるODA（政府開発援助）に関する予算審議に関し、過去のODAにまつわる帝商物産の商社活動をめぐる疑惑の核心に触れる重要な尋問事項に対し敢行されたものであって、国会の重要な権能である国政調査権の行使を阻害したものであり、会社の信頼保持、一部政治家に対する配慮という動機もあつたにせよ、その責任は免れ得ない。外為法違反については……」

いらだちを感じながら、矢島はそつと立ち上って出口に向った。ロビーに出てタバコに火をつけた。まるでカンガル―裁判だと矢島は思った。偽証罪なら毎日政治家が犯しているし、外為法違反など経済がボーダーレスになった今の時代に、いちいち適用していたらビジネス活動などできなくなる。

誰かが矢島の肩をたたいた。振り返ると山岡が立っていた。

「こりゃ驚きだな。帝商物産はオヤジを見限ったと聞いてたが。それとも、オヤジの葬式を確認してこいとても社長に言われたのかい」

「御挨拶だな」

口元に笑いを浮かべながら、山岡が言った。しかし、すぐ真顔になって、

「誰からの命令でもない。私自身来たかったから来たんだ。あの人には随分と世話になってるしな。もちろん今の私には何もできないが」

「帝商物産にも血の通った人間がいたとはね」

「そう皮肉られても仕方がないことは、いさぎよく認めざるを得ないが……」

と言って、山岡が口ごもった。

四年前、事件が発覚したとき、飯島は社長の座を目前にしながら副社長を辞任し、平の取締役となった。そのポストも、裁判が開始されたとき、取締役会の要請で降りた。しかし、裁判が決着してから、徐々に元のポストに戻すという約束があることを、矢島はいつか飯島から聞いたことがあった。

「ところで山岡さん、オヤジの処遇はどうなるのかね」

「さあ……それは上層部が決めることから、私のような下っ端にはどうとも言えないね」

「よく言うよ。カミソリの山岡が、そうへりくだっては嫌味だぜ」

実際、山岡卓也の頭の回転の速さとビジネス・センスは、社内随一と言われている。小柄でやせたその外見は凡庸そのものだが、これまでの彼の実績と能力は、社長の久保を始め誰もが認めていた。年はまだ四十すぎだが、帝商物産始まって以来最年少の取締役としてその名を連ね、いずれは会社を背負って立つ男と誰もが認めている逸材だった。

「マジな話どうなんだい」

山岡がちよつと考えてから、

「子会社への出向がオフアールされるだろう。もちろん、飯島さんがそれを断わるということを見越してだがね」

「そうすれば、何事もなくなりタイアメントに追い込める。万事メデタシということか……」

「すべて上層部のシナリオ通りに行けばの話だがね」

「……………」

山岡の目がかすかに笑っていた。

矢島には山岡の言わんとするところがすぐにわかった。無言で二、三度うなずいた。

「こんなことを現役取締役である私が言うのは不謹慎かもしれないが、飯島さんあつての帝商物産だったんだ。まだ六十歳だし、これからひと花もふた花も咲かせることができる人だよ。必ず

会社が、再びあの人を必要とするときがくるに違いないんだ。それも、ごく近々だろう」

人一倍注意深い山岡にしては、かなり大胆かつ具体的な言い方だ。彼の言葉の裏にある意味は、ひとつしかない。矢島は感じとった。近々帝商物産は、何かどこかい山を張ろうとしている。そしてそれは、飯島の豪腕が不可欠となるようなこと……

「矢島さん」

山岡があわてて言った。

「そう深刻に考えなくてくれよ。私の独り言なんだから。忘れてくれ。それより今夜、食事に付き合ってくれないか。いろいろ話したいこともあるし。赤坂の川島でどうだい」

矢島は、彼の誘いを二つ返事で受けた。

そのとき、法廷のドアが開いて、傍聴人や記者たちが出てきた。

山岡は飯島を迎えに行くと言って、廷内に姿を消した。

一台の国産ハイヤーが玄関口にすべり込んだ。

数分後、弁護士たちに囲まれて飯島が出てきた。カメラのフラッシュがたかれ、怒号のような記者団からの質問が飛び交う。山岡がピツタリと飯島のそばに寄り添っていた。

飯島二郎は口を真一文字に結び、胸を張って、トレード・マークともいえる多少肩をいからせる歩き方で車に近づいてきた。全く悪びれてる様子もない。「飯島天皇」の面目まさに躍如たるものがあつた。

車のわきに立っている矢島を見ると、その顔に笑みを浮かべながら歩を早めて近づいてきた。

「健二、よく来てくれたな」

片手を差し出した。矢島が黙ってそれを握った。相変わらず熱くきついグリップだった。

飯島が何やら言った。しかし、周りの記者団からの大声の質問にさえぎられて矢島には聞きとれなかった。矢島が身をかがめるようにして耳を飯島に近づけた。

飯島が太く低い声で、

「いいレッスンだったよ。しかし、今度は同じミスは繰り返さないからな。ファイターズ・ダイ・「戦士はなかなか死なないものだ」ハード」

と言って、ニコツと笑った。これぞ矢島が知る飯島だった。かつて帝商物産で働いていたとき、何度同じ言葉を聞かされてきたことか。『ファイターズ・ダイ・ハード』……それは飯島のモットーであり、帝商物産のアグレッシヴさを表わすキャッチ・フレーズでもあった。

矢島が飯島の耳にささやいた。

「オヤジさんは死ぬまでファイターですよ。もちろん控訴はするんでしょう」

「いや、これ以上時間を無駄にはしたくない」

山岡が車のドアを開けて、飯島に何やらささやいた。飯島が素早く乗り込み、山岡もあとに従った。

矢島は、しばらく走り去る車を見つめていた。十人ほどの記者たちが、矢島をとり囲んだ。

「飯島さんと何を話したんです」

「明日の天気についてさ」